狩場茂津多・檜山の自然

——狩場茂津多•檜山道立自然公園——



1995

北海道自然保護協会

狩場茂津多・檜山の自然

——狩場茂津多•檜山道立自然公園——



北海道自然保護協会

N 7 7 7 P

狩場茂津多、檜山道立自然公園

狩場茂津多道立自然公園と、檜山道立自然公園は、いずれも北海道の西南、渡島半島の西側にあります。

狩場茂津多道立自然公園は、檜山と後志の両支庁にま たがり、面積は226.5平方キロメートルあります。

狩場山を中心とした山岳域と、北は、寿都の弁慶岬から、島牧海岸、茂津多岬、瀬棚海岸、さらに南へ太櫓の 水垂岬までの、海岸地域が含まれています。

狩場山は、この地方でもっとも高い火山で、山麓は冷温帯の代表的落葉広葉樹ブナを主とする林に包まれています。大平山には石灰岩性の植物の生育がみられ、貴重な存在となっています。

海岸は種々の火山岩類からなり、荒々しい海蝕地形を つくり、特徴ある優れた景観をみせています。

檜山道立自然公園は、狩場茂津多道立自然公園の南に つづき、檜山海岸と奥尻島がふくまれる170.1平方キロ メートルの面積をもっています。

海岸段丘がよく発達する奥尻島をはじめ、半島地域の 荒く美しい海岸の景観、奥尻島のキタゴョウ群落、夷王 山のヤマツツジなど、北海道西南部の特色ある自然が満 喫できる地域となっています。

また、これら自然公園域に含まれてはおりませんが、 天然記念物にもなっている、黒松内の歌才にある北限の ブナ林もあわせて紹介いたしました。

 表
 紙
 舘の岬

 扉
 ピレオギク

 公園の紹介
 ハマフウロ

推薦のことば

北海道は、雄大な山岳とそこに広がる深い原生林、広大な湿原や 湖沼群、そして生き生きと暮らす野生生物など、北国らしい豊かな 自然に恵まれており、六つの国立公園、五つの国定公園、十二の道 立自然公園を持っています。

「狩場茂津多・檜山の自然-狩場茂津多・檜山道立自然公園」は、こうした自然公園のうち、狩場山一帯に広がるブナ林やお花畑、渓谷美にすぐれた河川など原始性の高い狩場茂津多道立自然公園、奥尻島と渡島半島西海岸に連なる海蝕崖(がい)や海成段丘など、すぐれた海岸景観に特色のある檜山道立自然公園の二つを紹介したガイドブックで、自然公園のシリーズとして3冊目となります。

自然は、人間に多くの恵みを与えてくれるかけがえのない財産です。この貴重な自然を次の世代へ引き継いでいくためにも、私たちの中により一層自然を大切にする心を育て、自然と人間が共存する社会を築いていかなければなりません。

このガイドブックが多くの皆さんに愛読され、北海道の自然について理解と関心を一層深めるきっかけとなるよう、心から願っています。

北海道知事 横 路 孝 弘



センニンソウ



おだやかな日もある日本海

道南の自然は北海道と本州を結ぶ「かけ橋」

北海道の自然は、亜寒帯的な気候に支配された雄大な景観に恵まれています。そうした中で、今回のシリーズにとりあげられた「狩場茂津多・檜山の自然ー狩場茂津多・檜山道立自然公園」の地域は、長く北海道に住みなれた人が訪れると、北海道の奥地とは異なった本州的な温かみを感じます。その一方で本州から訪れた観光客は、やはり道南の自然に北海道らしい匂いを感ずるといいます。

つまり道南の自然は、本州的な温帯の要素と北海道的な亜寒帯の 要素が適度に入り交じった、北海道と本州を結ぶ「かけ橋」の部分 に相当しているのでしょう。その代表的なものが、道南にあって札 幌付近では見られない「ブナ林」です。またそうした自然の中での 人々の暮らしぶりにも、歴史の古さがただよっています。

この小さな本が「狩場茂津多・檜山の自然」を訪ねる方々に、道 南の魅力を知るガイドの一助となれば幸いです。またこの本を作る に当っては、北海道、前田一歩園財団、全国労働者共済生活協同組 合連合会から、ご支援いただきましたことにお礼を申しあげます。

目 次

火山と日本海の傑作	八木	健三 2
狩場山と大平山の高山植物	佐藤	謙12
大鳥、小鳥	三浦	二郎23
狩場・茂津多の昆虫たち	大原	昌宏31
花と樹と人と	三木	昇39
北限のブナ・歌才ブナ林	明石	かおる49
あとがきに代えて	福地	郁子56



コモチイワレンゲ(大成)



紫水晶 (鮪の岬)





火山と日本海の傑作 - 渡島半島の地質と地形 -

八木 健三

狩場茂津多と檜山の両道立自然公園は渡島半島の日本海岸に沿い、北は寿都半島の弁慶岬から、南は上ノ国夷王山、西は奥尻島にわたり広がっています。この地域は本州から延びる東北弧とカムチャッカ、千島から延びる千島弧の会合部に当たり、中生代以前の古い基盤の上に新生代の火山活動が盛んに行われたグリーンタフ(緑色凝灰岩)地域に属し、それが日本海の荒波で浸食されて様々な地形が作られたのです。その代表的な地質と地形について述べて見ましょう。

興味ある火山岩類の産状

この地域で、第三紀には海底火山活動が盛んに行われた結果、海水で急冷された溶岩や火砕堆積物が広く分布し、特徴のある産状を示しています。とくに急冷による枕状溶岩やハイアロクラスタイトと呼ぶガラス質岩石の破片集合など、様々な型のものが見られ興味をそそります。

また固い溶岩と脆い火山灰などが混じり合った岩体は、海の浸食作用の結果、いろいろな形の奇岩となり、ダルマ岩、女郎岩、立岩などと呼ばれていますが、中でも傑作は親子熊岩で、白糸岬と長磯岬の2箇所で見られます。



見子熊

夕陽に浮かぶシルエットは子熊によせる母熊の愛情を人々の心に刻 むことでしょう。

奥尻島のシンボル「鍋釣岩」は、砂岩を貫いた安山岩の岩脈が海 蝕に抵抗して残った後、その中央部が削り取られて環のようになっ たものです。天然の巧みさに感心させられ、天然記念物に指定し保 護する資格が十分にあると思います。連絡船が港に入るとき鍋釣岩 が見えてくると、「ああ、奥尻に着いたなあ」と感慨を覚えたもの でした。

奥尻島東海岸の弁天岬には、シルト岩・砂岩からなる海蝕台が発達し、玄武岩の岩脈がこれを貫いているのがよく観察されます。





ハイアロクラスタイト



火山のいろいろ

狩場山

このような第三紀の火山岩の基盤の上に聳えているのが、この自然公園内での最高峰の狩場山、主に角閃石石英安山岩の狩場山溶岩からなっており、頂上は比較的平らです。西の茂津多岬、南の真駒内川、それに東の賀老原野からの3つの登山ルートがありますが、賀老ルートが最短で、東狩場山の肩に出ると間もなく頂上です。一等三角点だけに眺望は素晴らしく、山腹をおおう見事なブナの原始林がよく見渡せます。

この火山では東から時計回りにフモン岳、東狩場山、狩場山、前山、それにオコッナイ岳が半径 4 kmの半円形に並び、外側は溶岩流の原地形が保たれているのに、内側は急斜面で所々に基盤の岩石が露出しています。これを見ると、火山体の上部を破壊した大きな爆裂火口ではないかとも考えられます。最近の研究によると、下部の玄武岩溶岩のK-Ar年代は70万年ですが、上部の狩場山溶岩のそれは25万年で、従来考えられていたよりはるかに若く、ほぼニセコアンヌプリ(20万年)と同時代と考えられます。

東山麓の賀老原野の千走川の賀老の滝は、見事な柱状節理を示す 狩場山溶岩の絶壁にかかり、高さ70m、幅30m。高さでは層雲峡の 銀河の滝に一歩譲りますが、とうとうと水煙を上げているのは迫力 満点。私の推奨する北海道の名瀑で、朝日新聞選定の北海道自然100 選に加えられています。



海底の「後志火山」

狩場山の外にもこの地域に第四紀の火山のあることが、ごく最近明らかになりました。と言っても陸上ではなく、海底の火山です。20万分の1の海底地形図を見ると、奥尻島は渡島半島の西に平行して、ほぼ南北にのびた奥尻海嶺の上にあり、この海嶺の西側は断層で切られ、2000mの海底に落ち込んでいます。奥尻海嶺の北の延長上、積丹半島の西北60㎞にある後志海山は、3500mの海底から聳え、その頂は海面下僅か110mとなっています。

最近北海道東海大学による海洋調査で、この海山を構成する岩石が採集されましたが、そのうち安山岩のK-Ar年代は90万年と決定されました。したがってこの海山は第四紀(170万年以後)に活動した高さ約3400mに及ぶ火山であることが判明し、「後志火山」と命名されました。またその岩石が北の利尻岳、南の渡島大島の溶岩と共通したアルカリに富む化学的特徴をもつことも、興味深いことです。

上がパーライト 下が黒曜石

火山活動の恵み 奥尻島のパーライト

公園各地からは玄武岩や安山岩が石材、またはバラスとして採石されていますが、地下資源として最も注目されるのは奥尻島勝間山のパーライトでしょう。これは第三紀の地層を貫くガラス質の流紋岩で、下に黒い黒曜石、上に灰白色のパーライトがあります。これらは細かな割れ目が多く、小さな破片となり、それを800-1200°に加熱すると、膨張してポップコーンのようになるのです。この膨張パーライトは建築材料、断熱材などとして広い用途があり、本州の工場に送られています。



黒曜石



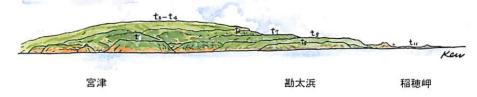
タカの目硫黄



硫黄鉱山跡



連絡船より見る奥尻島の海岸段丘



海岸段丘

つぎには日本海の作用について述べて見ましょう。

海中での海食作用によってできた平坦面が、地震にともなう地殻変動で海面上に現れたのが海岸段丘です。地殻変動の回数によって何段もの海岸段丘が作られ、上段のものほど古いのです。渡島半島の海岸にはひろく、第1段丘(海抜高度60-120m)、第2段丘(30-60m)、そして最も新しい第3段丘(10-30m)が発達しています。弁慶岬で弁慶の銅像が立っている小高い丘は第2段丘です。

奥尻島にはこの段丘がよく発達し、全体で11面もあります。島の最高峰の神威岳を造るのが最古の t_1 面、島の北端稲穂岬と南端青苗岬に発達するのが、最も新しい t_{11} 面です。瀬棚港からの連絡船の上からは、神威岳の t_1 、 t_2 を除くこれらの段丘がよく眺められます。

江差追分に歌われた鷗島は防波堤で江差の町と結ばれた海岸段丘からなる島。強い西風のため島の頂は木も生えない草原で、東側だけイタヤやミズナラが生えています。その下の海中にはトックリのような瓶子岩が立ち、しめ縄がネジリ鉢巻きのように巻いてあるのが人目を引きます。西側の千畳敷には凝灰岩が一面に露出し、海食で削られた台地に大きな凹みがあり、名付けて弁慶の足跡。ここにも弁慶は生きていました。

東洋一の硫黄鉱山

この勝間山では第三紀の砂岩・泥岩層の間や凝灰岩の孔隙中に、火山活動によって噴出した硫黄が沈殿して層をなし、ときには美しい半透明の「タカの目硫黄」も見られます。1930年代には「奥尻硫黄鉱山」として硫黄鉱石が盛んに採掘され、一時は東洋一の生産量を誇ったこともありました。当時は事務所や精錬場、住宅はもとより、小学校もおかれ繁栄をきわめたのでしたが、いまはその残骸すらもなく、鉱業の盛衰に深い感慨を禁じ得ません。



平らな段丘と対照的に、荒々しい山並みが一気に海になだれ落ち ているのが岬です。瀬棚町の展望台から北を眺めると、最高峰の狩 場山がひときわ高く聳え、その尾根が西方で海に没しているのが茂 津多岬、白い波頭も遠望されます。女性的な段丘に対し、岬は男性 的な地形と言えましょう。茂津多岬のように火山岩からなる岬は、 白糸岬、藁岩岬、鮪ノ岬などがありますが、鮪ノ岬では安山岩溶岩 の柱状節理と板状節理が組あわさって、美しい模様を作り、鮪の鱗 に似ているというので、鮪ノ岬と名付けられ、天然記念物に指定さ れています。

花崗岩からなる岬には水垂岬、尾花岬、帆越岬などが挙げられ、 巨大な花崗岩塊が海中に立ち並ぶ光景は、火山岩の岬とはまた異なっ た重厚な感じを与えます。

長い間、これらの岬は海岸の交通に大きな障害となっており、20 年程前学生を引率し茂津多岬を見学したときは、再び瀬棚に引き返 してから札幌に戻ったのでしたが、今度は1978年に完成した長さ 1978mのトンネルによって、かつての難所を苦もなく北に抜けるこ とができました。北の雄冬トンネルとともに、陸の孤島を解消した 北海道開発局の努力は高く評価されるでしょう。いまは道路網も発 達したため、日高横断道路など不必要と考えられる道路建設が盛ん に行われているのは残念です。

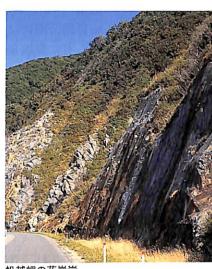
花崗岩類

この公園内の花崗岩類は分布は広くなく、 奥尻島の幾つかの岩体と、渡島半島の毛無山 を中心とし、水垂岬から帆越岬に及ぶ太櫓岩 体のみです。いずれも角閃石、黒雲母を含む 花崗閃緑岩で、そのK-Ar年代は9500万-1億1400万年、東北地方の阿武隈花崗岩帯に 属しています。

水垂岬の立岩には、白黒の縞模様の岩石が 複雑に褶曲して露出し、一見片麻岩のように 見えますが、よく調べると白い部分は石英と 長石、黒い部分は黒雲母、角閃石、ザクロ石 などからなり、砂岩質と泥岩質の互層した堆 積岩が、太櫓花崗岩体の接触変成作用によっ て白黒縞状のホルンフェルスになったことが 判りました。まるで本でも折り曲げた様な見 事な褶曲構造もよく観察されます。







帆越岬の花崗岩



河鹿温泉の沈積塔

温泉

この自然公園には温泉も少なくありません。奥尻島では幌内と神威脇、ともに食塩泉です。神威脇の温泉は北海道南西沖地震前から温度が入湯出来ないくらい上がっていたといいます(管理人の体験談)。今度の地震での唯一の前兆現象であるといえましょう。

半島部では厚沢部町の五厘沢がもっとも有名で、これも弱食塩泉です。島牧村には宮内、千走、永豊などの温泉があり、いずれもボーリングで掘りあてたものです。

島牧村の泊川の上流にある河鹿温泉は泊川層の石灰岩から湧出するもので、河畔に高さ2m程の石灰華の沈積塔が出来ており、その頂上部から高温の湯が溢れています。大平山への登山者が川原に孔をほり、入浴を楽しんでいます。

北海道南西沖地震

1993年7月12日午後10時17分、渡島半島西方沖を震源とする地震が発生し、気象庁により、震央はN42°47′、E139°12′、震源の深さ34km、M7.8と発表され、北海道南西沖地震と命名されました。この地震により渡島半島では、死者210名、行方不明29名、重軽傷者302名、住家全壊567棟、半壊299棟の大きな被害を受けました。

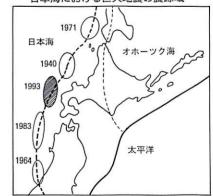
特に奥尻島では南端の青苗岬が津波に襲われたあと、火事が発生 し全町が焼け、津波による犠牲者も多数でました。日本科学者会議 の地震調査団に加わった私は、青苗岬を訪れ見渡す限り一面の焼け 野が原となった町をみて、いいしれないショックを禁じえませんでした。また渡島半島部でも液状化現象による土砂の噴出や地割れが方々で観察されました。ただ、多くの人々から「1983年の日本海中部地震での津波の体験から、地震直後に脱出して命は助かりました」という話をきいたのは、せめてもの慰めでした。

日本海では南から1964年の新潟地震、1983年の日本海中部地震、1940年の積丹半島沖地震、さらに1971年のサハリン南西沖地震と巨大地震が起こっていましたが、今度その真ん中に北海道南西沖地震がおこったことは、地震発生の線状構造の存在を決定的にした出来事と受け止められています。

その結果、プレートについての新説が出されるようになりました。 これまで北海道の東半分は北米プレート、西半分はユーラシア・プレートに属し、北海道中軸帯がプレート境界とされていたのが、今度は北海道全体が北米プレートで、プレート境界は日本海にあり、そこで両プレートの衝突によって上に述べた巨大地震が発生したのだというのです。

1994年秋には千島沖合の地震、また暮れには三陸はるか沖地震が相次いで起こり、北海道も様々な被害を受けています。ともあれ、悲惨な津波による事故を防止するためにも、総合的な防災対策の確立が要望されています。

日本海における巨大地震の震源域



----- 太平洋プレートと北米プレートの境界
----- 従来の北米プレートと
ユーラシア・プレートの境界

----- 新しく推定された北米プレートと ユーラシア・プレートの境界



大平山の石灰岩地

狩場山と大平山の高山植物

佐藤 謙

道南、黒松内低地帯以南の高山植物は、最高峰である狩場山(標高1519.9m)と、それに向かい合う大平山(標高1190.6m)に最もたくさん見られます。ところが、この二つの山の高山植物は、明らかに違っています。ここに、二つの山の対立的な高山植物について、生育地環境を中心に解説してみましょう。

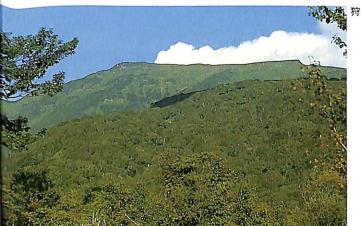
明らかに違う二つの山の高山植物

二つの山の高山植物の違いは、多数の研究に基づいて渡邊・佐藤(1987)がまとめております。狩場山と大平山に限られる植物はそれぞれ40種と47種、これに対して共通する植物は28種です。共通する植物が一方に限られた植物と比べてかなり少ないことから、二つの山の高山植物の違いが大きいことが分かります。では、何故違うのでしょうか。

まず、二つの山における高山植物の生育地 環境を全般的に比較してみましょう。

「標高」を比べますと、狩場山では標高約1200m以上、大平山では標高約800m以上に高山植物が生育しております。狩場山の標高は北海道の高山植物の生育にとってまずまずの高さですが、大平山の標高はかなり低いのです。結局、「温度」は、狩場山では適度に寒いのに、大平山ではかなり暖かいと推測できます。

次に、「地質」を比べますと、火山である 狩場山は、「安山岩」からつくられています。 一方、大平山は、堆積岩の「石灰岩」や「砂 岩・頁岩」からつくられております。



狩場↓



大平山の石灰岩地

「地形」をみますと、狩場山の山頂が緩傾斜であるのに対して、大平山は山麓から山頂まで急傾斜です。そのため、狩場山山頂では、緩傾斜地に形成される「雪田」や「湿原」が見られ、小規模な急傾斜地に「雪崩地」が認められます。それに対して、大平山では急峻な「石灰岩の崖地と岩礫地」の外、広く「雪崩地」が発達しております。

以上のように、高山植物の生育地環境は、 二つの山で明らかに違います。でも、これら の環境のどの内容が、高山植物の違いに関係 しているのでしょうか。

石灰岩と植物

石灰岩を多く含む土壌は、カルシウム以外の栄養が極端に少なく、強いアルカリ性を示して乾燥しやすい特徴があります。このような土壌では、普通の植物が生育できない代わりに、そこに限られる「石灰岩植物」や、低い標高でも「高山植物」が出現します。このような理由から、石灰岩は植物にとって「特殊岩」と言われております。

したがって、地質の「石灰岩」が、低い標 高の大平山に狩場山とは違う高山植物が多く 見られる第一の理由となりそうです。

大平山の高山植物は、同じ石灰岩からつくられた道央の崕山(標高1057m)と多くが共通しています。渡邊・佐藤(1987)によりますと、大平山と崕山の間では、共通種が44種、大平山と崕山に限られる植物はそれぞれ31種と12種が数えられております。結局、大平山の高山植物は、近くの狩場山よりも、遠く離れた崕山の方にはるかに共通性が強いことが分かります。

狩場山に見られず、大平山と崕山に共通する植物には、完全に石灰岩地に限られる「石灰岩植物」と石灰岩との結び付きがかなり強い「石灰岩を好む植物」が含まれております。





イチョウシダ〔梅沢〕





シリベシナズナ〔梅沢〕



トガクシデンダ「梅沢)

(1) 石灰岩植物

イチョウシダとアオチャセンシダは、大平 山、崕山を初めとして道内から日本各地、世 界的には北極を取り巻いて広分布しますが、 つねに「石灰岩植物」であることが知られて おります。一方、分布が狭く、大平山と崕山 にしか見られないオオヒラウスユキソウも、 「石灰岩植物」になります。崕山にはありま せんが、大平山の固有種シリベシナズナも、 「石灰岩植物」です。

(2) 石灰岩を好む植物

世界中に広分布するチャセンシダ、北極を 取り巻いて広分布するトガクシデンダとカラ フトイワスゲ、東北アジアで北極を取り巻い て分布するチョウノスケソウは、必ずしも石 灰岩地に限られませんが、「石灰岩を好む植 物」と考えられています。

トガクシデンダは、道内では大平山と崕山 にしかありませんので、「石灰岩植物」と考 えてしまいます。でも、この植物は、世界的 な分布では必ずしも石灰岩地に限られません。

反対に、チャセンシダ、チョウノスケソウ そしてカラフトイワスゲは、道内では大平山 と崕山の外、石灰岩と違う地質の山にも点々 と飛び離れて分布しております。でも、これ らの植物は、世界的にはかなり石灰岩を選ん で分布することが知られております。







ミヤマダイコンソウ〔梅沢〕

(3) 石灰岩を嫌う植物

ところで、狩場山に限られる植物の中で、 ミヤマダイコンソウ、ナガバツガザクラ、イ ワヒゲ、ウラシマツツジ、イワウメ、そして サマニョモギは、ハイマツ低木林に囲まれた 「安山岩の露岩地」に生育しております。こ れらの植物は、北海道の高山に広く分布しま すが、石灰岩地にはほとんど見られません。 また、一般に、石灰岩地では酸性を好むツツ チョウノスケソウ [梅沢] ジ科植物を欠くことが知られております。し たがって、これらの植物は、石灰岩植物とは 逆に「石灰岩を嫌う植物」と考えられます。







アツモリソウ〔梅沢〕

地形と植物

「地形」は、とくに高山において重要な環境です。地形は積雪の 多さに影響し、積雪は冬の保温の程度、生育期間、そして雪崩など に関係します。狩場山と大平山の一方に限られる植物には、地形の 違いに応じた高山植物が多く認められます。

(1) 崖地、岩礫地の植物

大平山に限られた高山植物には、「崖地、岩礫地の植物」が認め られます。それを形成する地質は石灰岩に限られません。崖地やそ の下方の岩礫地は、土壌が発達しにくく栄養が乏しいこと、水が流 亡して乾燥しやすいこと、積雪が少なく冬の低温に植物が直接さら されることなど、普通の植物が生育できない環境となります。

地質を問わない「崖地、岩礫地の植物」として、エゾノヒメクラ マゴケ、イワウサギシダ、ミヤマビャクシン、カマヤリソウ、タカ ネグンバイ、イワベンケイ、イワキンバイ、イワオウギ、ミヤマウ イキョウ、サクラソウモドキ、ヒメエゾネギ、アツモリソウなどが 挙げられます。

さて、狩場山や大平山よりも高標高の高山では、冬に吹きっさら しとなり積雪が極端に少ない生育地、「風衝地」があります。この 「風衝地」はとくに冬の低温が著しい環境であり、そこに生育する 植物には水平分布の上で北極を取り巻いて広分布する植物が多い特 徴があります。このような「風衝地の植物」は、低標高でも、石灰 岩、輝緑岩類、安山岩質集塊岩などの「特殊岩」からなる「崖地、 岩礫地」には飛び離れて分布(隔離分布)しています。

大平山に限られた高山植物の大半は、実は、このような「風衝地 の植物」なのです。その例として、先に石灰岩と植物の関係の中で 取り上げたチョウノスケソウとカラフトイワスゲの外、リシリビャ クシン (ミヤマネズ)、カラフトマンテマ、ウラジロキンバイ、シ コタンヨモギ、チシマアマナ、ミヤマウシノケグサなど、北極を取 り巻いて広分布する植物が挙げられます。これらに加えて、世界に 広分布するヒメハナワラビ、北極を取り巻いて分布するがアジアと 北アメリカに分布するチシマゼキショウ、同様にユーラシア大陸に 分布するタカネナデシコ、北極を取り巻いた分布を示す種類に近縁 なホソバツメクサ、さらにアジアの東北部、北部および東部にそれ ぞれ分布するチシマギキョウとフタマタタンポポ、タカネオミナエ シおよびオノエスゲが挙げられます。

このように、極めて稀に隔離分布する高山植物が、大平山のよう な温帯の低い標高の山岳に多数見られることは、崖地、岩礫地であ る地形と、石灰岩である地質の、二つの環境が複合した結果と考え られます。







(2)雪田と湿原の植物

一方、狩場山に限られた高山植物は、北海道固有種カリバオウギ を除いて北海道の高山に普通なものが多く、その大半が「雪田」と 結び付いております。「雪田」は、多雪な凹地で、冬に風下側とな る南東ないし東斜面の緩傾斜地に形成されます。雪田では、多雪の ために、冬の寒さが植物に直接影響しないこと、夏には雪解け水に よって土壌が湿ること、生育期間が短いことなどが特徴となります。 このような「雪田の植物」として、タカネヒカゲノカズラ、アラ シグサ、チングルマ、ミヤマキンバイ、シラネニンジン、アオノツ ガザクラ、イワイチョウ、ヨツバシオガマ、エゾウサギギク、キン スゲ、イトキンスゲ、タカネスズメノヒエ、ヒメイワショウブ、タ カネトンボ、などを挙げることができます。これらの「雪田の植物」 には、多雪で、冷涼湿潤となるアジア東北部から北アメリカにかけ て分布する植物が多い特徴があります。

狩場山に限られた植物には、さらにツルコケモモ、エゾホソイ、 ミカヅキグサそしてワタスゲなど「湿原」の植物も含まれておりま す。「湿原」は、雪田の下方など、とりわけ水が集中する緩傾斜地 に形成されます。

したがって、狩場山に限られた植物は、緩傾斜地の「雪田」と 「湿原」に生育することが多く、地形と深い関係を持っております。

狩場山の雪田群落



(3)雪崩地の植物

狩場山と大平山に共通する高山植物は、最 も普通なハイマツ低木林の構成種、ハイマツ、 タカネナナカマドおよびコケモモを除きます と、ほとんどが「雪崩地の植物」または「雪 田から雪崩地しにかけて牛育する植物です。

その例としてミネヤナギ、エゾホソバトリ カブト、エゾノハクサンイチゲ、ミヤマキン ポウゲ、シナノキンバイソウ、ハイオトギリ、 チシマフウロ、ハクサンボウフウ、リシリス ゲ、ナガバキタアザミ、ウコンウツギなどが 挙げられます。

そして、日本固有種であるベニバナイチゴ とフギレオオバキスミレは、日本海側の多雪 山地に限られますので、狩場山と大平山の両 方を特徴づけております。



大平山のエゾホソバトリカブト



大平山雪崩地のミヤマキンポウゲ



オオヒラタンポポ

まとめ

大平山と狩場山の高山植物の違いは、生育 地環境の違いと大いに関係しておりました。 狩場山では「雪田 | と「湿原 | という地形、 大平山では「石灰岩」という地質とともに、 それによって形成される「崖地、岩礫地」と いう地形に応じて、それぞれ異なる高山植物 が生育しているのです。

北海道のほとんどの高山植物は、氷河期の 生き残り(遺存生物)であり、寒帯や亜寒帯 の植物と関係を持っています。その歴史の中

で高山植物が種類ごとに生育地環境の違いに応じて遺存したことは、 まことに興味深いことです。高山植物は、このような壮大な地球の 歴史上の遺産と言えます。

ところが、ことに大平山を特徴づけるオオヒラウスユキソウ、チョ ウノスケソウ、ウラジロキンバイなどの稀少植物は、盗堀によって 激減し、アッモリソウは絶滅状態で、もはや過去の記録だけが残っ ています。また、狩場山の名前がついた北海道固有種のカリバオウ ギは、初期の盗堀によって絶滅してしまったと思われますが、現在 狩場山のどこにあるのか、まったく分からない現状です。

盗堀は、最も大切な固有種や稀な隔離分布種をとくに選んで対象 としますので、それらを絶滅に向かわせる最大の原因となっており ます。人間の小さな行為が、高山植物の壮大な存在を失わせている 現状は、余りにも悲しいことと思います。





大鳥、小鳥

三浦 二郎

檜山地方は確認鳥種が一番少なかった

1981年に北海道生活環境部自然保護課で作成した「北海道におけ る鳥類の地域別牛息状況 | では、檜山管内でリストアップされた鳥 の種類は、わずかに94種にしか過ぎませんでした。その時、根室管 内では284種、網走で246種、十勝で253種でしたから%か%です。

この原因は、この地方に野鳥を観察する人-バードウォッチャー、 正しくはバーダーーが大変少なくて、記録されたものも部分的だっ たからです。

もう一つは、この地方の海岸線が写真で見るように海からいきな り崖になっていて、湿地や原野が少ないこと、汐の干満差が太平洋 やオホーック海より小さくて干潟や潮だまりができにくい条件のた め、原野性の鳥や干潟性のシギ、チドリ類の生息環境として不向き だからだと考えられます。

その後10年後に改訂された「北海道地域別鳥類リスト」(日本野 鳥の会北海道ブロック協)では、檜山地方で223種と格段に充実さ れました。しかし上記の上位ランクの地方で300種を超すか、それ に近い種類数がリストアップされておりますので、この地方の海岸 線に多様さがないという条件は、相変らずこの地方の特性になって いるわけです。



イソヒヨドリ



ハクセキレイ



カワセミ

海岸の崖地にはイソヒヨドリが多い

このように崖地の続く海岸線には、いたる所にイソヒヨドリがすみついております。本州以南では留鳥なので一年中海岸で見られますが、北海道には春になってから夏鳥として海岸線沿いに北上し、自分のテリトリーを構え、ッッピーコーピーと朗らかにさえずります。崖の岩のさけ目などに巣作りをします。道南地方には多いのですが、北に行くにつれて少なくなり、太平洋側ではえりも岬までで、道東地方になると砂浜海岸になるので見かけるのは少なくなります。

イソヒヨドリと同じような環境を好むハクセキレイも巣作りをしています。

この海岸では時々カワセミが海にダイビングして魚とりをしているのが見かけられます。 「カワセミじゃなくて海セミだな」と笑ってしまいます。川が短かくて、すぐに海に落ち込んでいるようなところで見かけられるのです。



どこの沢にもオオルリがさえずっている

海岸から川に沿って内陸に入ると、どんな小さな沢にも必ずといってよいほどオオルリのテリトリーがあります。たいがい木の梢に止まってピーリーリー、ホイピーピピと朗らかに鳴き、さえずりの最後にギギッときしむような声を出すのですぐわかります。しかし、抜けるような晴天の日は、頭から背面のるり色が青空にとけ込んで、案外見つけにくいものです。注意して観察しましょう。

キビタキは樹木の中間あたりでオーシック ックとさえずっています。木の葉に邪魔され て見つけにくいのですが、根気よく観察すれ ばその美しい姿を見つけることができます。

オオルリは暖地性の小鳥なので、道北・道 東地方では多くありませんが、キビタキはサ ハリンまで分布しています。近縁のマミジロ キビタキは大陸系の小鳥ですが、最近道南地 方でしばしば記録されるようになりました。



キビタキ

奥尻島にはトビとカケスがいないという

奥尻島は独特の生態系を保っている貴重な島です。全島が鳥獣保 護区に指定されているのももっともなことです。北海道本土には生 息しているヒグマやマムシがいないことは古くから知られていまし たが、キツネやエゾライチョウもいないようです。そのかわり、タ ヌキはやたらに多いのです。道路わきのあちこちに彼等のため糞が うず高くつもっています。

ところで「島にはトビとカケスがいないんだ」という話を聞かされました。トビの餌になるものは海岸にはいくらでもあり、カケスが好むブナの実は全島の山にあるのに、北海道本土の山野にありふれたこの2種の鳥がいないということは、どうしたことでしょう。本土から20km足らずの距離ですから、彼等のつばさだったらひとっ飛びだと思うのですが……。ふしぎなことです。







ウミネココロニーはなぜできたか、なぜ消えたのか?

1985年ごろから、奥尻島の東海岸宮津にウミネコというカモメのコロニー(集団繁殖地)ができました。宮津小学校では、郷土自然学習の一環として、熱心に観察を始めました。観察は、ウミネコを驚かさないように、コロニーが見下ろせる崖の上に作られたヨシズ張りの観察小屋からなされていました。

このコロニーがどうしてできたのか、その理由はよくわかりませんが、一つ考えられるのは、体がひとまわり大きいオオセグロカモメの勢力の強さに負けたウミネコの集団がうつってきたのではないかということです。

ところが1990年ごろから次第に数が減って現在は完全に消滅して しまいました。野生化したミンクに卵やひなが奪われるようになっ たからでないかということです。オオセグロカモメやミンクといっ た天敵によって、ウミネコの生活が変えられたということです。





トンネル内のイワツバメの巣

トンネルはイワツバメの楽園

江差町から小樽市までの国道229 号は「追分ソーランライン」という愛称がつけられています。この国道は、断崖の多い地形なので開削には苦労が多かったようで、トンネルを掘削した箇所がいたる所にあります。特に狩場山のすその狩場トンネルは一番長大で、1980 m余もあります。その前後にも大小のトンネルが掘られております。それらのトンネルはイワツバメ

のコロニーに利用されています。イワツバメは、トンネル内に架けられている電線ケーブルを台にして、その上に泥をつみ上げて巣を作ります。新しいトンネルにも作りますが、旧道の使われなくなった古いトンネルも利用します。

また、古いトンネルはコウモリのねぐらとしても利用されております。北海道のコウモリの研究はまだ進められておりませんので、よい研究テーマになりそうです。

狩場山高原はノゴマの天国

海岸沿いに指定地が断続的に点在する檜山道立自然公園では奥尻 島が、狩場茂津多道立自然公園では狩場山が面的な広がりをもつ指 定地です。

狩場山登山を試みてみよう。標高1520mのこの山は、渡島半島部での最高峰ですが、賀老高原から登ると、アプローチは長いけれど日帰り登山が楽しめます。

登山口からのチシマザサ群落をウグイスの 声に励まされて抜けると、ブナとダケカンバ の林がパッチ状にあり、高山鳥であるクロジ がホーイチュチュルピーと迎えてくれます。 少しきつい登りをつめると東狩場山のすそに とりつきます。ウラジロナナカマドにハイマ ッを交えた林を抜ける頃には、ヒーヒーとウ ソの口笛があちこちから聞こえます。山すそ の樹林帯を抜けると、稜線がお花畑になって いる狩場高原が開けます。

色とりどりのお花畑の高山植物の美しさに 見とれている耳に、キョロキリ キーキョロ チリリと元気のよいノゴマの声が飛び込んで きます。声のする方に目をこらすと、ハイマ ツのてっぺんやタカネナナカマドの梢で、喉 の紅色をひけらかすようにノゴマの雄がさえ ずっているのが見つけられます。密度はかな り高く、この高原がすっかりノゴマに占領さ れている感じがします。まさにノゴマの天国 です。

ノゴマという小鳥は、日本では主に北海道で繁殖し冬は東南アジアで越冬します。繁殖環境は原野的植生の所であれば標高は関係ありません。弁慶岬のような海岸草原でもよく、狩場高原でもよいのです。渡りの時は厚沢部町富里付近を通るらしく、そこでは1シーズンで2000羽も標識放鳥されており日本一を記録しております。狩場高原のノゴマもそこを通っているのかも知れません。







ノゴマ

図は「フィールドガイド 日本の野鳥」(日本野鳥の会」 「鳥630図鑑」(日本鳥類保護連盟) より転写



クロツラヘラサギ (笹浪甲衛)

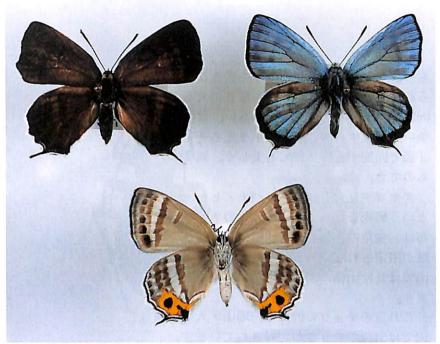


道南日本海側には珍鳥続々

1987年3月末から4月初めにかけて、上ノ 国町夷王山の北側の天ノ川やその南の大安住 川の河口付近に、大陸系の珍島クロッラへラ サギがしばらく居ついたことがあります。上 ノ国町役場の笹浪甲衛さんが写真撮影に成功 して、記録に残しました。ヘラサギの分布は かなり広いのですが、クロッラヘラサギの方 は朝鮮北西部の限られた牛息地が知られてい るだけなのに、遠い北海道にまでどうしてやっ てきたのか謎です。

また、1988年9月24日に賀老高原での調査 の網にカラフトムシクイが捕獲されました。 メジロの群れと一緒に網にかかったので、大 陸から迷い込んだカラフトムシクイが、体型 カラフトムシクイ の似ているメジロと行動を共にしていたのだ ろうと推測されます。カラフトムシクイは、 シベリアのアムール川をはさんだ地域とサハ リンで繁殖し、中国南部で越冬する小鳥なの で、北海道に迷行する可能性は大きく、その 後苫小牧・中標津・札幌・天売島など広い範 囲で記録されました。体重は6gちょっとで すから、アオジの20gの%という小さい鳥で、 よく遠くまで飛んで来たものだと感心させら れます。

> この他にも、道南日本海側ではいろいろな 珍鳥が続々と記録されています。珍鳥だけを 目の色かえてさがすのでなく、鳥の生息環境 を保全してやり、生息の状況をもっときめ細 かく調べる価値のある地域だと思います。



フジミドリシジミ [七飯町産・小樽市博物館所蔵]

狩場・茂津多の昆虫たち

大原 昌宏

虫たちの北限

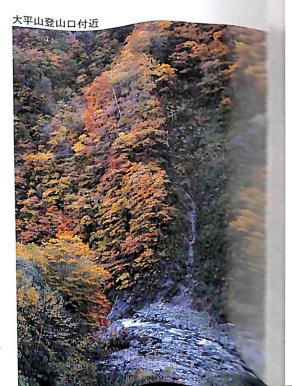
黒松内町から長万部町にかけての低地は、 黒松内低地帯と呼ばれています。この低地帯 から北には、ブナが分布していないことはよ く知られています。昆虫でもこの低地帯がほ ぼ北限となっているものがあります。

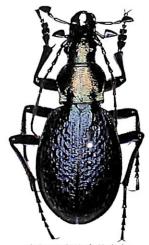
チョウでは、フジミドリシジミとオオゴマ シジミが、狩場山周辺を北限にしています。 フジミドリシジミはブナを食べて生活して いるチョウですので、ブナのある地域にしか 分布できません。雄は翅に緑色の金属光沢を

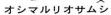
もち、ブナ林の梢でなわばりを張ることが知られています。他の雄がなわばりに入ると、回旋をしながら2頭でもつれあい、なわばり争いをします。緑色のキラキラ光るチョウが2頭で回旋する様はとても美しく、興味深いものです。

オオゴマシジミは、クロバナノヒキオコシ という植物を食べています。このチョウの分 布は、食草の植物の生育状態に影響されて地 域が限定されているといわれています。 狩場 山では北桧山側の山麓に生息域が集中してい ます。

これらのチョウの他にも狩場山・大平山周 辺では54種のチョウが記録されています。









カリバキンオサムシ [西島 浩博士所蔵]

オシマルリオサムシ

北海道を代表する昆虫の一つにオオルリオサムシがあります。オサムシは、ゴミムシの仲間で地面を歩き回る甲虫の一種ですが、その「ゴミ」という名前とは反対に、体の表面(鞘翅)に金属光沢をもった美しい昆虫です。

さて渡島半島から黒松内低地帯にかけて、そのオオルリオサムシ よりもさらに美麗な昆虫とされる「オシマルリオサムシ」が分布し ています。

帯広畜産大学名誉教授・西島 浩博士の研究によれば、オシマルリオサムシの北限採集地は大平山とされています。大平山には、セリ科とキク科植物が生える大草原が広がっており、そこにオサムシの食物にあたるカタツムリ類が多数生息しているため、極めてたくさんのオシマルリオサムシが生息していることがわかっています。

この他にもアイヌキンオサムシの一亜種にあたる「カリバキンオサムシ」が、狩場山高山域に分布しています。しかし、狩場山にはカリバキンオサムシに適した環境は限られているようで、その個体数は極めて少なく、とても採集するのがむづかしい珍しいオサムシになっています。





トラフホソバネカミキリ [北海道大学昆虫体系学教室所蔵]

本州に似た豊かな昆虫相

狩場山の島牧側のふもとには、登山者のベースにもなる千走川温泉があります。温泉宿の近くの薪には、木材を食べる昆虫たちが集まっています。特に夜、懐中電灯を片手に見回ると、薪の上は、水色の美しいルリボシカミキリ、鞘翅の細くなったトラフホソバネカミキリ、オオマルクビカミキリ、コバネカミキリ、オオマルクビカミキリ、ホソカミキリなどなど、実にさまざまな種類のカミキリムシでいっぱいです。これらの昆虫を観察していると、狩場山の原生林がいろいる種類の昆虫たちを産みだし、はぐくんでいるのだと感じます。



なかでもトラフホソバネカミキリは道南、道央から知られる北海 道では南方系のカミキリです。狩場山にはブナ林もあることから、 道央の山々などに比べると、より本州に近い昆虫相を呈していると いうことができます。

その例として、私たちの1988年の調査でも、賀老の滝でマツナガエンマムシが採集されました。この虫は本州から知られており北海道からは記録のない種でした。大平山の泊川の河原でクマの糞より採集したヤマハマベエンマムシも本州まで知られており北海道では初記録でした。また狩場山が海に沈み込む茂津多付近では今まで函館までしか記録のなかったヒシカミキリが採集されています。これは飛べないカミキリですので、本州から海流にのって分布を広げてきた昆虫と考えられます。

このように狩場・茂津多付近は、生物の分布を考えるのには、とても興味深い地域なのです。

日本本土初記録のイワハマムシ

国道229号線を瀬棚から寿都に向けて走ると、いくつものトンネルをくぐります。そのいくつか目のトンネルを抜けると、左手に大きなキノコのような形をした「亀岩」が現れます。

海岸の岩場には、打ち上げられた海草や、魚や貝の死体があり、その下に昆虫が生活しています。いろいろな昆虫を採集するためには、岩礁は見のがせない採集ポイントの一つなのです。1989年の調査の際も、この「亀岩」に立ち寄ってみました。

小雨の降る中、岩場の海草や石をひっくり返し、微小な昆虫をさがします。雨もひどくなり、もう引き返そうかというときに発見されたのが、日本本土から記録のなかった「イワハマムシ」です。

イワハマムシは、北アメリカ、カムチャッカ、南千島から知られていた甲虫ですが日本本土からの記録はなかったのです。

最初にこの虫を見たときは、日本にいないはずの虫がどうして採集されたのか不思議でした。しかし、このときの採集記録が発表されてからは、道内の各地で採集されたことが報告され、ほぼ全道のお場に分布していることがわかってきました。そして、今では従来域から北海道にまで分布地が広がったことになります。

域から北伊垣によくカルとこの イワハマムシのほかに、この亀岩からはクロコブセスジ ムシという岩礁に特有の昆虫も採集されています。 グルマガ





イワハマムシ(左)、クロコブセスジダルマガムシ(右) 集岩(上)、イワハマムシのすむ亀裂(下)▷



可憐なハエとエゾカンゾウ

初夏6月、寿都の弁慶岬の崖は、一面エゾカンゾウの花で黄色く 色付きます。その黄色い花の中をのぞくと、からだが5ミリほどの 小さな美しいハエが生活しているのに気づくことでしょう。

このハエは、キスゲミモグリバエ。1993年に、ここ寿都弁慶岬で発見されたハエです。エゾカンゾウの花に卵を産み、幼虫はその鞘のなかで種子(実)を食べて大きくなります。このハエは、ハモグリバエというハエの仲間なのですが、他のハモグリバエのように幼虫が薄い葉の間にもぐって葉を食べるという習性はありません。このハエのように実にもぐるハモグリバエは日本では非常に珍しいものです。

この虫を新種として発見した岩崎暁生氏の撮影した素晴らしいキスゲミモグリバエの写真を載せておきます。

狩場や茂津多周辺では、昆虫の調査がまだまだ不十分ですので、 今後、このような新種の発見は次々となされることでしょう。

> エゾカンゾウの花の中のキスゲミモグリバエ(左)、 キスゲミモグリバエ成虫(右)[岩崎暁生氏撮影]







寿都· 弁慶



岩場のカンゾウ(ゼンテイカ)

花と樹と人と

三木 昇

海岸の花の旅にでる

道南地方は、北海道でもひと味違う花の見られるところ。中でも海岸一帯に広がる道立自然公園には、初夏から秋にかけて様々な花が咲き乱れます。ここでは皆さんを、私のお気に入りの花園にご案内しましょう。

六月なかば海岸に美しい花の風景を作るのがカンゾウ(ゼンテイカ)の花です。公園の北の入口にあたる弁慶岬にまず行ってみましょう。岬一帯の海岸斜面をオレンジに彩ります。セリの仲間で背の高いアマニュウもみられます。大きな弁慶の像のある岬を散策。遠くに狩場、大平の山々、そして茂津多岬、広がる日本海と大きな風景が広がります。

次に車を走らせて島牧の海岸を走り抜けましょう。海岸近くまでイタヤ林の急斜面が迫りその下に人家が並びます。人家がとだえると断崖絶壁の続く茂津多岬の海岸に入ります。ごつごつした岩壁が海に落ちる崖となり、あるところでは岩礁を作り、あるいは奇岩となって海からそそり立ちます。白糸の滝も断崖から落ちて風光明媚なところです。断崖はこの公園の特徴ある風景です。

島牧海岸のイタヤ林



乙部の街からみえる館の岬







エゾイヌナズナ



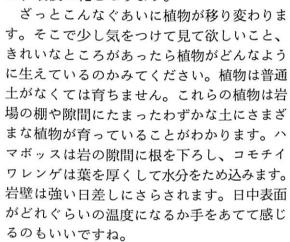
エゾスカシユリ



ツリガネニンジンとエゾカワラナデシコ

断崖にさまざまな草花が私たちの目を楽しませてくれます。最初の花はエゾイヌナズナの白い花です。このころは、まだ緑が少し増しはじめたころで訪れる人もすくない五月頃のことです。崖のところどころが白くなります。この花が終わると回りの植物は急速に成長を始めていろいろな花が咲き出します。

ゼンテイカのオレンジ、エゾスカシユリは 鮮やかな朱色、エゾネギは薄紫。海のもので はハマエンドウの赤紫や濃い赤紫のハマナス、 ツリガネニンジンの紫、エゾカワラマツバの クリーム色、ノコギリソウの白い花。ハマフ ウロやエゾカワラナデシコのピンク。花では ありませんがヨモギの仲間のアサギリソウの 白緑色の姿が岩壁に見えます。岩壁の水のし たたるようなところではダイモンジソウの白 い花もみることができます。花の形が漢字の 「大」の字になっていないか確かめてみるの もおもしろいですよ。 秋、九月、海遊びの人たちも少なくなくなった海岸の岩壁が、ピレオギクで白くなります。さらに10月、コモチイワレンゲの塔のような白緑の花が咲きます。寒いのによく咲いていた、最後の花となります。



斜面の角度やそれを形作る岩石により、生 えているものもちがっているのです。こんな 小さなところにも気をつけて見て行くとおも しろくなってきます。



断崖のアサギリソウ



エゾネキ



コモチイワレンゲ



ハマボッス



後志利別川河口の砂丘







砂丘をみる

海岸の断崖の植物がよいのは島牧から瀬棚 そして北檜山、大成町そして熊石、乙部町、 さらには江差のかもめ島や上ノ国の海岸段丘 が海にせまり崖となるところです。こうした 崖とは別の風景として砂丘があります。その ひとつ瀬棚町と北檜山町を分ける後志利別川 の河口に大きなものがあります。南側は砂採 取の手が入らず自然の姿が残されているとこ ろです。砂丘の後ろにできた湿地も少しあっ て湿地の植物もみることができます。

何にしてもここは車が入れないので歩くし か手がありません。歩くことはよく見ること ハマニガナ ができるチャンスです。

> 砂丘を横切り波打ち際にでてみると、そこ には長い海岸線にハマニンニンクや、ハマナ スの海岸の植物が広がっています。海岸の砂 は波や強い風に移動します。植物は砂に深く 埋められても、砂の中で茎を伸ばして砂の上 にでることができるのです。もちろん塩水に も強く、夏の焼け付くような砂の温度にも耐 スえられる植物たちです。

ハマニガナの黄色、ハマボウフウの白い花。地味であるが白っぽ い茎のハマニンニク、この葉は刈り取られてスノコに編まれて海苔 を干すのに使われています。もちろん砂丘にはつきものハマナスも 鮮かな花をつけています。

海岸は海のしぶきをまともにうけるところです。波穏やかな時に はなかなかそのことがわかりませんが、少し波の荒い時に訪れてみ ると、砕けた波頭が小さな粒になってあたりに漂い、白く霧のかかっ たようになっていることがあります。植物は塩にまぶされるのです。

壊される砂丘

さてその砂丘、利別川の北側、河口から瀬棚の町のそばまであり ましたが、こちらは建設用の砂の採取で砂丘の姿を留めていません。 都市化によって人間はものすごく砂を使うのです。もう一つの砂丘、 江差に近い厚沢部川の河口砂丘、砂坂をみることにしましょう。こ こはかつて砂丘の森が壊されたところです。かつて人々が薪に切っ てしまったのです。今は深い緑のクロマツ林に覆われ、波打ち際の 方は利別川と同じような海浜植物がたくさんあります。この様子は 北側の五厘沢の高台から森をみるのがよいでしょう。

砂丘林再造成の努力

この風景の歴史を紐解くと、もともと砂丘にはカシワやエゾイタ ヤの林があったところです。この林は内陸に入る風を押さえていた にもかかわらず、人間がそれを切ってしまったことから植林の努力 が始まったのです。

海岸草原のハマフウロやマルバトウキ





砂垢の砂丘林

最初の入植者たちはおそらく海で仕事をする漁民だったのでしょう。いつも顔を海にむけて暮らしているので、風下の内陸の農業開拓のことまで考えがまわらなかったからだと思われます。禿山の砂丘から砂が吹き飛らとされて内陸の農耕地や人家に甚大な被害を与になるです。日高のえりものたことは有名ですが、ここも海岸林造成の苦労が実もなったのですが、このなければわからない人間の思かしさです。さて、現在森は復活し飛砂の被害のことが伝わっているでしょうか。自然を壊した愚かしさを伝えなくてはなりません。

**Contact Action Contact Action Cont

砂坂のクロマツ

寿都の海岸のススキ草原

もう少し海岸の林について考えてみましょう。公園の入口、寿都から弁慶岬まで進みます。両側にはススキ原が広がります。秋は一面のススキの穂が銀色に輝く美しい風景を作ります。これは昔からススキ原だったのでしょうか。中に入ると段々や区切りの土盛りがわかります。実はかつての畑のあとなのです。昔、防風林に植えたポプラが目立ちます。だれが耕しはじめたのでしょうか。

漁業は薪がいる

ニシンは春早くにやってきます。寒い冬から漁の準備にかかります。人々は寒い冬どうしていたのでしょうか。暖をとるには薪がいります。そして、ご飯も薪でたいていました。そしてとれたニシンの油を絞るにもたくさん薪がいりました。

そのため、次々と周辺から切り出し、それを切り尽くせばさらに 山奥から木を切り出していきます。昔は木を切ったから山に木を植 えようというようなことはしませんでした。そんなものは奥へ行け ばいくらでもあると考えていたからです。山は次々と禿山になって いきました。江戸時代の末ですが箱館奉行所から木をきる時は切り 過ぎないようにという指示もでているほどです。

日本海海岸の歴史

寿都の町は江戸時代から和人がたくさん住んでいたところです。 最初にきた和人たちは何をしていたのでしょうか。海の幸をとって 本州に送っていたのです。ナマコやアワビ、そして有名なのはニシンですね。これらのものを煮て干して蓄え、あるいは油をしぼった りしていたのです。この加工にはたくさんの燃料を必要としました。



それに人々が生活するには食料がいります。 米は本州から船できます。そしてヒエやムギ、 あるいは野菜をつくりくらしていました。冬 にむけて蓄えられたものもあるでしょう。

今見ている風景が田舎のことで、そんなに 自然が荒らされていないという思いは誤りで す。石油、石炭、プロパンガスの無い時代は 燃料は薪、つまり山の木しかなかったのです から。人々は一方的に資源を略奪していまし た。最近ではニシンが来なくなったり、海草 が減ったのは沿岸の森を切り過ぎたからと考 える研究もあります。

人々の跡

それから人々が作っていた畑、最初は木が 生えていたところですが木を切ったあと畑に されていきました。こう思って見るとあちら こちらの段丘斜面に段々畑の跡が見えてきま す。これはニシンで栄えていた日本海側の一 般的な風景です。

人家に近い海岸の風景はエゾイタヤ林→伐 採→耕作→放置→ススキ草原→ササ原→エゾ イタヤ林というように元の姿に移り変わって いくと思われます。回りから地下茎を伸ばし て広がったササ原。畑のあとが一度ササに覆 われると厚いササの日陰で木がでてこれず長 い間ササ原でいるのです。畑の跡にササより も早く、風で飛んで来たエゾイタヤが育てば イタヤ林に変わるのです。島牧村の本目灯台 にあがってみれば、段丘の上の畑がススキ原 になっているのがよくわかります。



島牧 イタドリの風よけ



本州からわたったコマ犬



須築海岸、手掘りのトンネルを人々が行来 していた

この他に人々が生活していた跡が木から読み取れます。島牧海岸の道路からみていても、段丘の上にポプラや白い葉をひるがえしているギンドロの木、ニセアカシアというような外国産の木が見えます。これは人間の植えたものですから、そこには人間が使っていた跡だということがわかります。

イタヤ林

島牧海岸をみてみると海、道路、人家、段 丘斜面の順で並んでいます。その斜面の林は エゾイタヤ林になっています。このエゾイタ ヤ林は海岸の急な斜面と塩分にたいして抵抗 性がある海岸の特徴ある植物です。寿都の畑 跡では人々は海岸の木を切り続けたと書きま したが、この急斜面の木はきっと切らなかま たと思います。それはこの段丘斜面はなかな か急で、木につかまって登らないとずり落ち そうなところが多いのです。そんなところの 木を切れば崖が崩落してしまうことを人々家 不を切れば崖が崩落してしまうことを人のは 経験的に知っていたはずです。現在、人家の 裏にコンクリートの擁壁をしたところがあっ て、崩壊に備えています。 危険なところであ ることを示しています。

おわりに

お話が寿都や島牧にかたよったようですが、 基本的なところはここで充分みることができ ます。江差方面や奥尻島も同じような風景を みることができます。

海岸の風景を少しみてきましたが、美しい 花々の影に人間と自然との係わりが少し見え てくればおもしろいと思います。



奥尻のエゾイタヤ林、土砂止めがある



島牧海岸の人家とイタヤ林

夏のブナ林

北限のブナ・歌才ブナ林

明石かおる

歌才のブナ林

ブナは日本の夏緑林を代表する樹木で、南は九州の大隈半島から、北は北海道の渡島半島の付け根にあたる黒松内低地帯まで分布しています。

後志管内黒松内町にある歌才ブナ林は、北限のブナ自生地として1928年に国の天然記念物に指定されました。指定にあたって調査に訪れた林学博士・新島善直は、その調査書の中で「周囲はほとんど全く開墾し尽されたる土地中にかくのごときぶなの原始林を残留せるは奇蹟というべし」と記しています。

日本各地で多くのブナが伐られ、奥山でしか原生の姿を見ることができなくなった現在、市街地からわずか 2 kmの丘陵地にある歌才ブナ林は、誰でも気軽に入れるブナ原生林として親しまれているのです。





ブナ林までの道

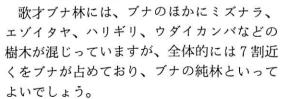
JR黒松内駅から車で5分ほどの道々沿いに『歌才ブナ林』と書かれた木製の案内板があります。歌才ブナ林はここより800m。左手にカラマツとシラカバの林、右手にケヤマハンノキやヤチダモが生える湿地を見ながら道を進みます。春まだ早い頃、この湿地にはミズバショウやエゾノリュウキンカの群落が見られます。左に道が折れ、山道らしくなると、ブナが所々に現われはじめます。トドマツの人工林を通りぬけると、やがて左手眼下に歌才川が見え、道はゆるやかに下っていきます。



ミズバショウ

ブナの純林

歌才川にかかる小さな木の橋を渡ると、ここからが天然記念物・歌才ブナ林です。ブナ林に入ってすぐ急な上り坂が続きますが、5分ほどで3本の大きなブナの木が立つ『ブナの木台』とよばれる場所に着きます。きつい上りにフーフー言って、まわりの景色を見る余裕がなかった人も、ここで一息つけば、すでにたくさんのブナの木に囲まれていることに気づくはずです。





早春のブナの木台

ブナの樹皮

ブナの樹皮はもともと灰白色で、そこに青 灰色や緑色・黄色、暗褐色などさまざまな色 の地衣類が独特の斑紋を作っています。この 斑紋が産卵期のサケを『ブナ』とよぶことが あります。ブナの木肌に触れてみましょう。 なめらかですべしています。おっと、が わる前にツタウルシがからみついていない りんによってはかぶれます。 ツタウルシのほかにも、ブナの幹にはツルアジウィやイワガラミといったつる性植物が巻きついていることがよくあります。

また、ブナは葉の形も特徴的です。多くの 木々の葉は縁がギザギザしているのに対して ブナの葉の縁は丸みを帯びた波状です。

ブナとミズナラ

さて、『ブナの木台』から道は2つに分れます。左手はマイヅルソウが群生する上り坂、右手はミズナラの大木へと続く道です。どちらを通ってもまた道は一本になりますから、行きと帰りで両方の道を通ることをお勧めします。ミズナラの大木は、1989年に環境庁が行なった巨木調査において、北海道で4番目、日本で10番目に太いミズナラとランクされた木です。幹周囲約6m、高さ約30mのこの大木は、間近かで見ると樹皮の壁がそそり立っているようで、まさに森の主といった感があります。



ブナの樹皮



ソタウルミ



ブナの葉と若い実



マイヅルソウ



ミズナラの大木



クマゲラの古い巣穴



ブナの芽吹き



キクザキイチ

ブナはなめらかな木肌をもち、優美な樹形をしていることから、ヨーロッパでは "森のお母さん"とよばれます。それに対し、ゴッゴッした木肌で、ブナよりもずっと太くなるミズナラは "森のお父さん"です。このミズナラの大木は樹令400年以上とも言われていますから、さしずめ "森のおじいさん"でしょうか。

遊歩道終点へ

分かれていた道がひとつになってしばらく 行くと、眼下にブナの樹冠を見渡すことがで きる『ギンリョウソウの坂』に至ります。こ の急な坂を下って、ひとつめの沢を越えると、 一幅の絵のような美しい林相がそこかしこに 現われるようになります。さらに、ふたつめ の沢を過ぎると、道が平らになり、ぱっと視 界が開けます。ここが歌才ブナ林の最後の見 どころ。まっすぐにのびる道、その両側に広 がるササの緑の中、ブナの大木が林立してい る様子は、まるで別世界に足を踏み入れたよ うな驚きを感じます。思わず上ばかり見上げ てしまいますが、時には足元にも目を向けて ください。遊歩道沿いのササを刈ったところ に小さなブナの幼木をみつけることができる でしょう。

この平らに広がるブナ林が終わるあたりに 『遊歩道終点』の看板がありますので、そこ から同じ道を引き返します。往復3時間あれ ば、ゆっくり観察しながら歩けるコースです。

歌オブナ林の四季

-春-

ブナの根元の雪がまるくとけはじめる頃、 灰色だったブナの山は赤みを帯びてきます。 あずき色の冬芽が芽吹きを前に大きくふくら んでくるからです。5月初旬、山は一日にし てライトグリーンのベールに包まれます。ブ ナの芽吹きです。

ブナ林に最初に春を告げるのはキクザキイチゲの白い花。そして、カタクリが遊歩道沿いをピンク色に染めます。少し遅れてエゾエンゴサク、エンレイソウ、ヒトリシズカなど、色とりどりの花が次々と咲き競います。早春のブナ林を彩るこれらの花は、木々が葉を繁らせるまでの短い間に花を咲かせ、実を結んで消えていくのです。

また、オオルリやキビタキなどの夏鳥がやって来て、美しい歌声を聞かせてくれるのもこの頃からです。

-夏-

ェゾハルゼミの声がブナ林全体をふるわせるようになると夏の到来です。ブナの葉は緑の濃さを増し、森全体に樹々の精気が満ちています。林床の花はランやユリ、イチヤクソウの仲間が主役です。春の花ほど華やかでなく、清楚にひっそりと咲いています。

6月から7月にかけて、湿っぽい落葉の中からギンリョウソウの花が頭をもたげます。 葉緑素をもたず、腐葉土から養分をとる腐生植物なので、なかば透き通った、白いロウのような色をした不思議な花です。



遊歩道のカタクリ



スミレサイシン



:トツバイチヤクソウ



ギンリョウソウ



ブナの



ブナの殼斗と堅剝



ブナの黄葉



初冬の歌才ブナ林遠景

一秋一

花の季節が終わると、マイヅルソウやツルシキミの赤い実、ツルリンドウの紫の実、そしてたくさんの種類のキノコがブナ林を訪れる者の目を楽しませてくれます。

ブナの実は9月から10月にかけて実ります。 ブナの実成りには豊作年と不作年があり、豊 作年は5~8年に1回と言われています。ブ ナの実は殻斗とよばれる殻に守られており、 乾燥すると殻斗が4つに割れて、中から三稜 形をした堅果が2つこぼれ落ちます。この実 は脂肪分に富み、ネズミやリスの大好物です。 人もこの実をいって食べたり、油をしぼった りして利用してきました。

ブナ林の紅葉は、ツタウルシやヤマブドウからはじまります。つづいてカエデ類が赤や 黄色に染まったあと、ようやく最後にブナが 黄色く色づきます。やがて黄色の葉が金茶色に変化したのち、一瞬の輝きをみせてあっという間に散っていくのです。

-冬-

まっ白な雪景色の中、ブナがその樹形をさらして静かに立っています。冬の楽しみは、かんじきをはいてのブナ林歩き。夏場はササに覆われて入ることができない場所に立派なブナの大木をみつけたり、キツネやウサギ、イタチなどの足跡を追って、ふだんなかなか姿を見せない動物たちの暮らしぶりを想像することもできます。



冬のブナ林

3月末、ひんやりしたブナの幹に耳をあてると、とくんとくんという音が聞こえることがあります。何の音なのかはまだ明らかではありませんが、春の芽吹きにそなえて大地から水を吸い上げるブナの生命の鼓動なのかもしれません。

黒松内町には、歌オブナ林のほかにも、 白井川ブナ林、添別ブナ林があり、観察 路が設けられています。白井川は山間地 のブナ、添別は民有地の二次林で、歌オ ブナ林とはまたちがった趣きです。

ブナ林をはじめとする黒松内の自然を紹介するために、1993年ブナセンターがオープンしました。展示ホール、図書室のほか木工や陶芸、食品加工が体験できる工房施設をそなえており、四季を通じてブナウオッチングなどのイベントも主催しています。



ブナセンター

あとがきに代えて -ブナの森で-

福地 郁子

春、厚沢部の土橋自然観察教育林ではヒノキアスナロの中エゾヤマザクラが咲きほこり、ブナの新緑がひときわ明るく若草色に森を染め、下草のテングスミレやミヤマスミレ、キバナノイカリソウが満開、キブシやオオバクロモジなどの低木も花を咲かせています。

夏、六百段以上の石段を上り、ブナに囲まれた賀老の滝に圧倒され、狩場山のふもとの炭酸水のわき出る川では、持参の砂糖で即席サイダーを楽しみました。大きなブナの木肌は様々な模様を描き、不思議なムードをだしています。菱形状の葉が幾重にもつき、実も充実しつつあるブナが標高800mまで続く狩場山。真っ黒いブドウマイマイに驚き、高山植物のお花畑の魅力も十分味わえる楽しい山登りです。

秋、八雲のユーラップ川支流にサケの遡上の観察で生き物の神秘 さを感じ、鉛川沿いの温泉ではブナに囲まれた露天風呂で満天の星 を仰ぎ、落ちるブナの葉とともにゆっくり湯舟につかります。ブナ の黄葉真っ盛りの雲石峠が薄いチョコレート色に染まり、やがて雪 の季節です。

狩場山から大平山を望む





大平山々頂

さて皆さん、北限のブナには、氷河期に本州まで南下しどの様に 北上してきたかなど様々な謎が含まれていることをご存じですか。 分布拡大の謎解きにミヤマカケスやホシガラスも登場します。これ からの謎解きに注目したいものです。

魅力の1つとしてブナをあげましたが、この読本を読まれ、様々な自然の魅力を是非発見してください。

この本を作成するにあたって、北海道および(財)前田一歩園財団ならびに全国労働者共済生活協同組合連合会からは財政補助をいただき、また執筆者はじめ多くの方々のご協力をいただきましたことを、厚くお礼申し上げます。

キツネヤナギ





大平山のカタクリ

執 筆 者

八木 健三 北海道大学名誉教授

佐藤 謙 北海学園大学教授

三浦 二郎 樽前自然教育研究所

大原 昌宏 小樽市博物館学芸員

三木 昇 自然ウオッチングセンター

明石かおる 黒松内 ブナセンター

福地 郁子 北海道自然保護協会

編集委員

佐藤 謙、福地 郁子、鮫島惇一郎

編集事務局

山辺 巌 俎北海道自然保護協会事務局

写真提供者

執筆者のほかに 梅沢 俊、鮫島惇一郎

狩場茂津多・檜山の自然 1995年3月発行

編集·発行 社団法人 北海道自然保護協会 〒060 札幌市中央区北3条西11丁目

加森ビル5

電話 (011) 251-5465

印 刷 株式会社 広報社印刷 〒064 札幌市中央区南8条西10丁目 石黒ビル

電話 (011) 532-8160 FAX 532-9060